

2023年1月1日 元旦礼拝

説教題「ここから始めよう」詩編71編1～8節、18～24節

主任牧師 加藤 誠

「主よ、あなたはわたしの希望」(詩編71編5節)。

主にあって2023年、おめでとうございます。クリスマスの恵みに照らされて、歩み始める新しい年。どのような時も、馬小屋の飼い葉桶に生まれたインマヌエルの主の良き力に守られて、主日ごとの礼拝を大切にしていきたいと思います。

イザヤ書に「荒れ野で呼びかける声がする」(40:3)という御言葉があります。

インマヌエルの主、イエス・キリストは「この荒れ野のように見える世界だけでも、神の国(神さまの愛の支配)は私たちの間に確かに生きて働いている。この神の国の働きをわたしと一緒に担っていこう！」という「呼びかけ」を携えて来てくださいました。この主イエスの「呼びかけ」を、日々、親しく聴いていきたいのです。主イエスは私たちを「友よ」と呼んでくださいます。私たちも主と親しくなっていきたいのです。

さて一年の最初の主の日の礼拝は「賛美」で始めたいと思い、詩編71編を選ばせていただきました。この詩編は「年老いた人の賛美」「信仰を杖とする人生」と呼ばれている詩編です。この詩人は生まれた時から信仰ある両親のもとで育てられ、老年に至る今日まで「神を賛美する人生」を送ってきましたが、その人生は必ずしも順風満帆だったわけではなく、災いに苦しめられて神から離れてしまった時もあったようです。「贖(あがな)ってくださった」(23節)とは、「代価を払って買い戻される」という意味です。苦しみがいていた時に、自分の力ではなく「神が苦しみの中にいた自分を、その恵みに連れ戻してくださった」経験をしたのでしよう。それゆえにこの人は「信仰を杖とする人生」の幸いをここでも語っています。

ただ「信仰の幸い」を語りながらも、今この人は大きな危機の中にあり、「敵」と呼ばざるを得ないものに囲まれ、神の救いを切実に求めています。この詩人についてはいろいろな推測がされていますが、例えばダビデ王だとすると、ダビデが年老いて息子アブサロムの反乱によって王位を追い落とされ、エルサレムの都から涙を流しながら出ていかざるを得なかった。その時のことを歌っているのではないかという説。あるいはイスラエルの人々がバビロン捕囚によって、異教徒たちの間で厳しい生活を強いられた時に歌われた賛美歌ではないかなど。

いすれにしても、生まれた時から神さまを賛美する人生を歩んできたとしても、若い時の信仰の祝福が、必ずしも年老いたときの安らぎを保証するわけではないことを教えてくれています。私たちは、残念ながらどんなに信仰深くあったとしても、それで自分の人生を願い通りのものにするにはできません。命のことは神さまの手の中にあり、私たちには計り知れない神さまのご計画があるのです。ただ、

どのような時にも、インマヌエルの主が私たちの重荷を共に担い、一緒に歩んでくださっている。その慰めと励ましをいただいでいくことができる。それがクリスマスの恵みです。

今日、この詩編 71 編で一つ注目したいのは 5 節の「主よ、あなたはわたしの希望」という言葉です。この「希望」という言葉の原意は「紐（ひも）」という意味があり、「縫（よ）る」「引っ張る」から「忍耐」が生まれ、「希望」という意味が生まれたそうです。どのような時にも神さまと私たちは「決して絶ち切られることのない紐で結ばれている」。私たちにとっては思いもかけない、想定外の苦難に襲われることがあるとしても、そのような時こそ、神さまは私たちを決して手放すことなく、しっかりと引っ張り続けてくださっている。その神さまによって、私たちは「希望」の中に歩むことができるのだ…という信仰の告白なのです。

F E B C というキリスト教のラジオ番組がありますが、その F E B C ニュースの投書欄に一人の女性の言葉が掲載されていました。この方はクリスチャンホームに育ったのですが、社会人になった時に「もう教会には行かない」と家を出たそうです。父親は「聖書だけは手許に置いてほしい。苦しい時に必ず助けてくれるから」と言いましたが、「これからは自分の道は自分で切り開くのだ」とすがすがしい気持ちで家を出たそうです。幼い頃からの夢だった看護師として充実した日々と送っていましたが、患者さんと向き合う中で、どんなに頑張っても人の力では命を伸ばすことができないことを目のあたりにし、心にぽっかり穴が空き、初めて自分から教会に通い始めます。そしてこう書かれています。「それから、看護師として生きる意味を探し続けましたが、患者さんと関わる中で、自分で生きる意味を見つけようとしなくても、神さまから与えられた命を生きること自体に意味があるのだと、ふと心で感じ、私が求めていた答えは日常の中にあつたことに気がつきました。神さまはずっと私の手をつかんでいてくださったのですね。この日常を大切に生きていきたいです」。

私たち人間は、自分の生きる意味を自分の力でつくり出すことはできません。社会のため、人のために良かれと思って力を注いだことが必ずしも良いとは限らないし、逆に「自分は何もできていない、何の役にも立ててない」と思ったとしても、神さまの御手の中で誰かのために用いられることがあるのです。どのような時にも、神さまの方では、わたしたちをしっかりとつかんでくださっている。この希望に支えられて、今年、神さまが「これをあなたにしてほしい」と、私たち一人ひとりに託してくださる働きを、神さまに力を尋ね求めながら担っていきたくて願います。

「主よ、あなたはわたしの希望です」。ここから始めていきましょう。